

草津市立矢倉小学校通信 令和3年2月1日 NO.20



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

だれを大事に なんのために どこに軸足を据えるか

学校内をウロウロすると目につくことがある。階段のすみっこ、廊下の片隅にできたホコリだまり。春から夏の気候の良い頃は校庭の枝葉の伸び具合、秋になれば落ち葉…。こうしたことが心に不思議とひっかかってしまうのだ。どうも心が落ち着かない…とついつい手を入れる。掃除機で吸い取ったり、剪定ばさみで刈り取ったり…。やっている最中はなぜか無心になれるから不思議だ。奥村さん（ずっとお世話になっていた学校ボランティア）が健在だったときと重なる心境で作業をすることもある。私の場合、庭木の剪定やら土いじり、大工仕事などには抵抗感がなく、逆に任せてほしいとばかりに前向きになれるのは、亡き父の影響が強い。小さい頃から父についてまわり、あれこれと手伝いをさせてもらっていたからだろう。

そんな父が今の私の姿を見ると、どのように映るのだろうか。ずいぶん前、私が教師になりたての頃、父が所用で滋賀へやってくる、そんなことがあった。そしてこともあろうに、時間があつたからと突然、勤め先に父は姿を現したのである。慌てたのは言うまでもない。放課後、訪問客が昇降口でお待ちだと校内電話で呼び出され、誰だろうと出向くと父がいたのである。しかも、ホウキを持ち出し、掃除をしていたものだから、「しなくていい。しなくていいから、だいじょうぶ。だいじょうぶ。」と思わず叫んでしまった。私の動揺に驚いた父もまた、勝手の違うところ、しかも息子が世話になっている職場には迷惑をかけまいと、手にしたホウキをそそくさと用具庫へ片付けた。上司に断りを入れ、父と連れ立って学校を出たところで、父はぼそぼそと言い出した。どうしてそうじをしてはいけないのか、と。確かに親が職場に出向いてそうじをするのはおかしいことだろうが、あまりにも昇降口がひどかったのだという。あれでは子どもがかわいそうだ。私は私で、子どもたちが出入りするところは土や砂がたまっていてあたりまえであり、すこしくらい土ボコリがひどくてもしかたがない、と妙な理屈で応じたのである。言い合いは、これ以上進展せず、それはそうとお互いの近況、ちょっとした滋賀の風土、観光案内のやりとりになった。やがて、自身の用事を済ませ、駅に見送りに行く車中のことである。ぽつんと一言、語ってくれたことが今も心に残っている。それは、「よろず、自分の都合を優先せずに、なにをするにも、だれを大事に、どこに軸足を据えるか、これを忘れないようにしないと、ものごとはうまくいかない、なにを基準にするかを見失わないように」という一言だった。そして、昇降口のそうじは恥をかかせたなあと反省の弁を述べ、けれど、かわいそうなのは子どもであり、気持ちよく学校に行つて、ああおもしろかったと勉強できるようにしてやってほしいと。

確かにそうだ。これは昇降口だけのことでないだろう。たとえば教室も家庭も同じこと。子どもも先生も親も、学ばねばならないことはそれぞれにあるはずだ。できていないことを相手のせいに行っていることはないだろうか。子ども優先の基準だけでものごとをすすめるのも、大人の勝手に子どもを振り回すことも、いずれにしても罪深い。あたりまえと片付けていることには、誰かの勝手を優先していることがありそうだ。反省したい。

校長 大林道範

紹介：学校ボランティア「奥村さんのあとをなんとか引き継ぎ、子どもたちのためにさせてもらいたい」と、なんと6名の方が名乗りをあげてくださいました。ありがたいことです。

中谷緑郎（未来のまち協議会会長）・梅村進（未来のまち協議会副会長）・久保均（スクールガード）・今西清高（スクールガード）・水谷務（美しいまち推進部会長）・福田武（馬池かがやきクラブ体育部長）